

ヨハニス・デ・レーケ・プロジェクト 日本とオランダの新たな水の担い手たち

ヨハニス・デ・レーケと日本・オランダの次世代水人材プロジェクト

2026年9月1日、デルフト工科大学（TU Delft）は、ブルーライン財団（Stichting Blauwe Lijn）と共同で、「ヨハニス・デ・レーケと日本・オランダの次世代水人材プロジェクト」を開始します。

本プロジェクトでは、2026年9月11日から25日までの期間、15名の学生が名古屋近郊の各務原市および木曽地域を対象とした学際的な研究・設計課題に取り組みます。

また、Universal Cruise、輪中館（Waju Museum）、国土交通省（MLIT）をはじめとする多くの関係機関のご協力のもと、ヨハニス・デ・レーケの功績や木曽川流域の治水事業について学ぶための視察・交流プログラムが実施されます。参加者は、水管理や河川整備、地域景観に関する歴史的・現代的な取り組みを現地で学ぶ機会を得ます。

期間中には、大阪港および複数の博物館も訪問する予定です。さらに、名古屋市立大学において調査・研究成果および提案内容の発表を行います。

帰国後、学生たちはデルフト工科大学において研究・設計課題を継続し、日本で得た知見を活かしながら最終成果の取りまとめを行います。

本プロジェクトは、水と共に生きる日本とオランダの知識と経験を共有し、次世代の水分野を担う人材の育成と国際交流の促進を目的としています。

さらに、10月7日および8日には、プロジェクトで得られた知見をブルーライン財団（Stichting Blauwe Lijn）のゼーラント州におけるパートナーであるデルタ・クライメート・センター（Delta Climate Center）および洪水博物館（Watersnoodmuseum）と共有するため、特別なゼーラント・プログラムが実施されます。

月8日には洪水博物館において、学際的なアプローチの重要性についても取り上げられます。とりわけ、40年前のオーステルスヘルデ防潮堤（Oosterscheldekering）建設事業において果たした役割を振り返るとともに、将来の水管理および気候変動への対応に向けたその意義について考察します。